

女性と美容医療

吉村浩太郎 (よしむら こうたろう)
東京大学形成外科

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1
東大病院形成外科
TEL:03-5800-8948
FAX:03-5800-8947
E-mail: kotaro-yoshimura@umin.ac.jp

本項のポイント

- ・従来は外科的治療しかなかったが、90年代以降の低侵襲治療の発達により、美容医療が飛躍的に一般化することになった。
- ・美容医療を受ける目的は、自分の生来の特徴を変えること(変身願望を満たす)、と若返ること(従来自分の外観に近づける)、の2つに大きく分けることができる。
- ・目立つシワの治療には、ボツリヌス菌毒素やフィラー(注入充填剤)がその目的に応じて使用されている。
- ・シミやイボの治療にはレーザー治療を中心にして、補助的に外用剤を使った治療が行われている。
- ・顔だけでなく、肥満やバストに対する美容治療の需要も大きく、外科的な治療から非侵襲的取組まで広く行われている。
- ・美容治療も低侵襲医療の普及とともに、かかりつけ医から受ける時代になりつつある。正確な診断と適切な情報提供のためにも、治療だけでなく、化粧やスキンケアなどの生活指導まで最新の広い知識が求められる。

はじめに

物質的に豊かで安全な社会になり、多くの女性が健康だけでなく美容にも強い関心を持っている。その関心の大きさは、スキンケア、メイクアップ、ヘアケア、ネイルケア、ダイエット、エクササイズ、下着、健康食品、サプリメントなど、美容のための多様な取り組みの各市場の大きさに反映されている。高齢化が進む中で、加齢に伴う外観上の衰えを医療の力を借りて改善し、より積極的な自分を取り戻そうとする意識も増えている。

美容外科という言葉は、外科的手法(手術)しかなかった古い時代に生まれたが、1990年代に入り医療技術や材料の進歩によって、美容目的においても注射やレーザーなど様々な低侵襲の治療法が開発された。治療上の回復期間を嫌う健康な患者を対象とする美容医療では、このことが飛躍的に普及するきっかけになった。

美容医療の治療対象

美容治療は、自分の特徴を変える治療(変身願望を満たす)と若返り治療(従来の自分の外観に近づける)に大きく分けることができる。若い患者は自分の遺伝的特徴に悩み前者が多く、高齢者になるほど後者が多い。治療対象は多岐に渡り、シワ、シミ、たるみ、瞼(二重など)、鼻(隆鼻や鼻尖形成)などの顔の問題から、バスト(豊胸や下垂形成)、痩身目的(脂肪吸引)などの体型の問題まである。さらに細かく挙げれば、禿髪(増毛、植毛)、エラやアゴの形成、乳房下垂(肥大)、乳頭(陥没、肥大)、性器(小陰唇肥大、陰形成)、脱毛(腋窩、下腿、前腕、ビキニライン)、にきび(痕)、毛孔開大、刺青、傷痕(ケロイド)、妊娠線(皮膚線条)の治療など、枚挙に暇がない。なかでも加齢変化を治す治療は抵抗が少なく、高齢化が進むため将来的にも一番注目される領域である。

皮膚の若返り治療 Skin rejuvenation

1)しわ、たるみ

加齢とともに顔の皮膚は菲薄化し脂肪は萎縮し支持力を失い、重力によって下垂したタルミが出る。外科的な若返り治療の中で代表的なものは facelift と呼ばれ、手術によって皮膚の下の浅筋膜を吊り上げて余分な皮膚を切除して、重力による軟部組織の下垂や余分な皮膚によるシワを取る。上下眼瞼の余剰皮膚や下垂も外科手術の代表的治療対象である。

静止時にも明瞭なシワ(前額、鼻唇溝や上口唇など)には、近年はコラーゲン(承認品)やヒアルロン酸(未承認のため個人輸入要だが、本邦市場の95%を占める)の注射(注入充填剤、フィラーとも呼ばれる)が多用されます。半年から1年で自然に吸収されるために安全性が高く、腫れもわずかであるため、当日からお化粧して普通の生活ができる。一方、眉間や外眼角の動きジワ(表情ジワ)にはボツリヌス菌毒素(承認品;ボトックスビスタ®)を注射して、骨格筋を数か月麻痺させることができる。細かいちりめんジワや皮膚の粗造には、レーザーや高周波の治療器などが用いられている。

2)シミ(色素沈着)

高齢になるとシミやイボも多くなり、顔の皮膚がぶち模様になったり、新陳代謝不良で皮膚の色も黄ばんでくる。盛り上がったイボ(脂漏性角化症)は液体窒素やレーザー(炭酸ガスレーザー)で治療が容易である。普通の平たいシミ(日光性色素斑)は専用のレーザー(ルビー、アレキサンドライト、ヤグレーザーなど)やレチノイン酸外用剤(未承認、自家調合)などで治療が可能で、ハイドロ

キノン(未承認、自家調合)などの漂白作用のある外用剤を併用して色素沈着を取っていく。皮膚の色や張り、つやなどの付随する若返り効果も期待することができる。

実際には肝斑、そばかすなど多様な色素沈着があるため、正確な臨床診断が必要であるが、自信がなければ、表面の盛り上がりがないければ、ハイドロキノンやビタミンCローション(化粧品類)の外用、トランサミンの内服などが無難である。

《コラム》

ボツリヌス菌毒素(ボツリヌストキシン)

現在世界的に最も施術数の多い美容治療で、米国では年間500万件以上行われている。神経毒でアセチルコリン放出を抑える。神経筋接合部での伝達遮断により骨格筋を麻痺させることができるとともに、コリン作動性交感神経を麻痺させること(発汗など)も可能である。麻痺は一時的で2~8ヶ月で自然回復する。各種表情ジワの治療、ガミースマイル(歯茎)の治療のほか、多汗症、腋臭症の発汗抑制、反復治療による廃用性萎縮を利用したエラ(咬筋)やふくらはぎ(腓腹筋)の形態改善などにも使われる。

乳房の美容治療

乳房に対する美容的関心は海外では特に高く、豊胸術は世界的に最も多く行われている美容手術である。乳房の大きさ(豊胸、縮小)、形態(下垂)だけでなく、乳頭(大きさ、形態、色)や乳輪(大きさ、色)に対する愁訴も多い。

食生活の欧米化に伴い、日本人女性の乳房も大きくなるとともに関心も高くなった。日本においても乳がんは女性患者の癌の発症率が1位となった。人工乳房がまだ国内未承認であることもあって、乳がんの再建率はまだ諸外国に比べて低い。加齢や出産・授乳に伴う乳房の形態変化(萎縮、下垂)に対する治療希望は、日本でも急速に増えている。

日本では縮小術は少なく、大半は豊胸術で、次に下垂修正の乳房固定術が多い。豊胸術は人工乳房もしくは自家脂肪移植術が行われる。医療以外では、矯正下着、マッサージクリーム、パッド、テーピングなどが形態改善を期待して利用されている。乳頭・乳輪の色素沈着は外用治療で、形態改善は手術で行われるが、乳輪の縮小は下垂手術とともに行われることが多い。

《コラム》

人工乳房

生理食塩水もしくはシリコンジェルを内容とするバッグで、プレストインプラントまたはプロテーゼとも呼ばれる。美容目的の豊胸術や乳癌切除後の乳房再建に使用する。液漏れなどを防ぐコーヒーズシリコンが登場し安全性が高くなった。大きさ、形、表面の性状など様々な種類があり、患者によって使い分ける。世界的には年間200万個以上が使用されているが、日本ではまだ承認品がないため、個人輸入する必要がある。

体型の美容治療

バストを除く体型の治療は、全体的もしくは部分的な肥満や、腹部や臀部の下垂や皮膚のタルミを対象としている。日本の女性は海外に比べて肥満が非常に少ないにもかかわらず、痩身への関心は異様に高い。外科的には脂肪吸引術になるが、侵襲の大きい治療には抵抗が大きく、食

事療法(ダイエットなど)、運動療法はじめとする非侵襲的な取り組みは医療の枠を超えて広く行われている。効果はまだ不十分ではあるが、近年は痩身を目的としたレーザー、高周波、冷却装置、注射剤など低侵襲の治療機器や材料が盛んに開発されてきている。エンダモロジー(ローラー付き陰圧器)などエステサロン用の機器なども医療機関で利用されている。

《コラム》

脂肪吸引術

世界的には美容手術では豊胸術の次に多い手術で年間100万件以上行われている。細い金属カニューレで吸引器を用いて皮膚の小切開から皮下脂肪組織を適量切除する。アドレナリン、局麻剤などを含む大量の生理食塩水を局所に注入することによって(Tumescent 法)、全身麻酔を行うことなく十分な鎮痛が得られるようになり、大量でなければ日帰り手術も可能になった。治療部位は腹部、大腿が多く、臀部、下腿、頸部なども行われる。

その他の美容治療

10-30代の女性ではニキビの患者も多い。レチノイド外用剤・内服薬やアンドロゲン阻害内服薬など副作用があるものの効果の高い治療法もある。四肢のムダ毛などの脱毛もニーズが非常に多く、従来は脱毛針で電気焼灼する針脱毛が広く行われていたが、今は脱毛レーザーが安全性も高く、短時間で行えるため一般的になった。脂肪を溶かす注射剤、鼻やオトガイを高くする注入剤や睫毛を伸ばす外用剤も登場し、従来の概念を覆すような非侵襲的美容治療が次々に開発されている。

《コラム》

美容医療における文化・人種的相違

欧米、南米は日本に比べて美容医療が非常に盛んである。ラテン系の国ではアジア人に比べて顔よりも体型についての関心が特に高い。肥満が多いこともその一因であろう。乳房に対する価値観にまだ欧米とは隔たりがあり、人工乳房による乳房再建や重度の乳房肥大・下垂の形成術は欧米では健康保険の対象であるが、アジアの国々では保険対象とならない。東アジアの中では日本人は香港人とともに美容医療に関しては最も保守的な部類で、アジアで最も美容医療が盛んな韓国の約半分(1人あたり)の医療規模である。

おわりに

美容治療はあくまで個々の患者自らの個人的な要求・発注に基づき実施されるパーソナライズド注文医療であり、自由診療となる。医師は患者の愁訴、希望に沿って、患者の妥当な判断の助けになる専門的情報を提供し、患者の自己決定、自己選択に委ねる。長寿化が進み、美容に関心の高い世代が高齢者の仲間入りをする中で、非侵襲低リスクを好む日本では、特にエステやかかりつけ医によってごく簡便に受けられる美容施術・治療が普及してきている。かかりつけ医が関わる美容皮膚治療の対象の多くは、老化に伴う症状(すなわち進行性)であり、反復治療が必要になることが多い。患者の美容的愁訴は千差万別であり、的確な臨床診断とともに、多岐にわたる治療薬剤・機器、化粧品・スキンケアや生活指導など広範な知識が必要になる。美容医学は特に近年は大企業による積極的な開発研究などの影響もあり日進月歩しており、常に最新の医療技

術に関する知識や経験も求められる分野である。